

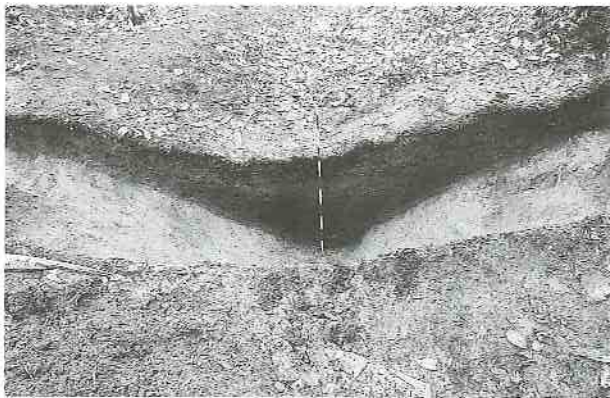
かも 市史だより

平成16年3月
No.9

編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



▲ 宮ノ浦古墳（通称熊野山）の墳丘



▲ 宮ノ浦古墳の周溝



▲ 福島3号・4号墳の周溝

加茂市唯一の古墳(宮ノ浦古墳・福島古墳群)

加茂市下条地区の丘陵上には、宮ノ浦古墳（通称熊野山）、福島一号～五号墳の合計六基の古墳が確認されています。昨年十一月～今年一月に古墳の規模や形、年代を明らかにすることを目的に測量と確認調査を行いました。

雑木や草を刈り払うとこもりとした円形の土饅頭が露わになりました。すべて円墳と考えられ、直径二十メートルほどの大きさです。確認調査は宮ノ浦古墳、福島三・四号墳に対して行い、それぞれ墳丘の裾に溝がめぐることが明らかとなりました。また、宮ノ浦古墳の周溝から少量の古式土師器が出土し、古墳であることが確実にわかりました。いずれの古墳も眼下の平野部を見渡せる眺めのいい場所を意識的に選んで造られています。古墳はお墓であるとともに、集落内外の人々に対して権力のシンボルとして機能していたと考えられます。

古墳の構築年代を明確にする資料はありませんが、形態や立地環境などから古墳時代前期（四世紀頃）の首長の墓と考えられます。同じ頃の村跡はいくつか調査されていますが、それらの人々を束ね開発を指揮した人物が眠る大変重要な遺跡です。

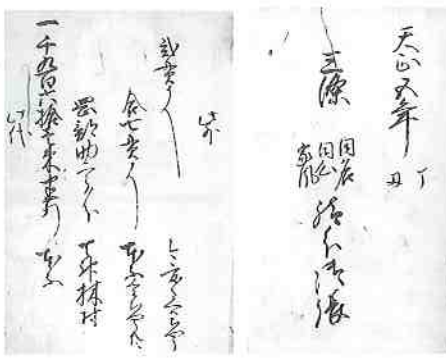
（民俗資料館 伊藤秀和）

地名から 信仰を読みとる

加茂市では大字地名だけでも二十七を数えます。地名はその土地の歴史を語る文化遺産でもあります。この地名を解き明かすことにより、遠く中世の姿、信仰の姿が見えてきます。

加茂市には、私が担当している中世の信仰に関する資料がぎわめて少ないのです。そこで地名から中世の信仰が読みとれないか、と考えてみました。

信濃川べりに天神林という地名があります。この地名からどんなイメージを抱かれる



▲天正五年「三条同名・同心・家風分御帳」(右)と、その「岡部助二郎分 天神林村」の部分

でしょうか。

天神社のまわりに繁茂した立派な林があったので、天神林という地名が生まれたのではないかと考えられています。私もそう思っていました。

でも、加茂市の天神林の場合には違うようです。この天神林に天神社(天満宮)が創建されたのはいつのことな

のでしょう。明治十六年(一八八三)の「南蒲原郡神社明細帳」の天神社の由緒には、「創立年月不詳。当村ノ産土神タリ。口碑ニ伝ル趣ハ、寛永十年当地開発ノ節、地中ヨリ掘出セル神像ヲ勧請・・・」と記されています。

これによると、天神社が創建されたのは、寛永十年(一六三三)頃のことだといいますが、天神林の地名は、それよりずっとずっと前の、天正五年(一五七七)の「三条同名・同心・家風分御帳」と

いう史料に出て来ているのです。神社が造られる以前からもう天神林という地名があったのです。

そうすると、天神林という地名のイメージをどう組み立て直せばいいのでしょうか。ここにヒントを与えてくれる史料があります。

正徳二年(一七一二)、加賀藩によって一斉に調査された神社台帳によりますと、越中(富山県)の砺波郡の場合

は、神社名を書かないで、諏訪林・神明林・春日林・地藏林・天王林・八幡林・権現林・大将軍林・市の神林などと記したものが、二四件もあるのです。

これらの神社には、正徳年間においても社殿は無く、森林社叢をもって

神社としていたのです。『富山県史』で古代越中の宗教を担当した橋本芳雄氏は、「これらの神社の創建が古代に遡るか否か不明である。しかし、社叢を以て神社とする習俗は、まぎれもなく古代信仰の遺風であろう」と記しています。

また、加茂市の現行の小字名を見ますと、大字加茂と大字加茂新田に「諏訪ノ木」という小字があります。

これも単純に、諏訪神社の境内に人目をひく老大木があって、そこから生まれた地名だろう、と思っていました。元禄十三年(一七〇〇)の「加茂組社堂帳」を見て、この考

えが間違っていることがわかりました。この「加茂組社堂帳」には、新発田藩領の加茂組といて、現在の田上町・加茂市の北部・三条市の東部の地域で、社殿も祠も記載が無く、「神木」のみが記された例が、三五件も存在しているのです。木を

神の依代としているのです。現加茂市域の分だけ書き出し

てみましょう。()内は依代の木です。

「加茂組社堂帳」に見える、木を依代とする神社

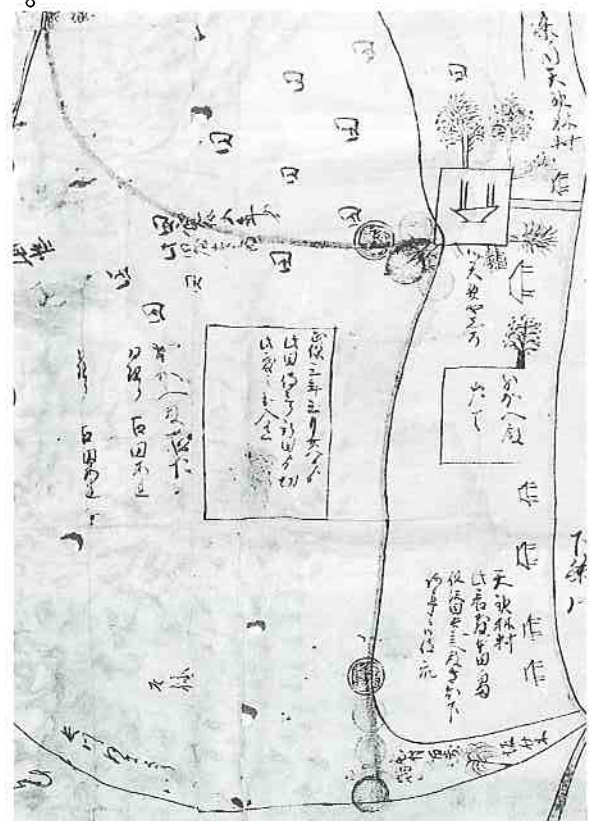
加茂町	諏訪大明神	(杉・榎)
加茂新田	諏訪大明神	(柳)
狭口村	諏訪大明神	(杉)
同	諏訪大明神	(柳)
上条村	熊野権現	(榎)
同	毘沙門	(松)

加茂町の諏訪大明神との関係は明らかではありませんが、

文禄四年(一五九五)の加茂村検地帳に、「すわだ」「すわてん」「すわのまへ」という地名が出て来ます。

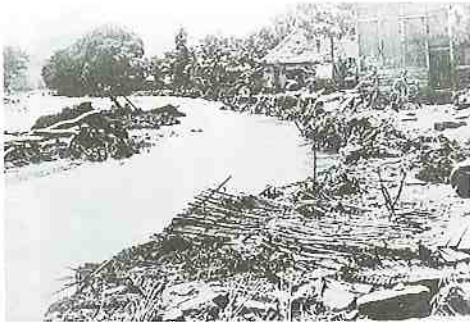
天神林や諏訪ノ木など林や木の付く地名から、古い中世の信仰が読み取れそうです。

(考古・古代・中世部会 金子達)



▲慶安元年加茂村下条村境界裁許絵図 神社が創建されたと伝えられる寛永10年(1633)から15年しか経っていない慶安元年(1648)に、既に人目をひくような大木が「天神やしろ」のまわりに存在していることが注目される。

かも私史



▲ 大正 15 年の大洪水（黒水地区）

如是我見聞

― かくの如く見聞せり ―



秋房

浅見 丞治

明治の末に生まれ四世代を経た。聞説、私が身近に思っていた大正時代のことが急速に忘れ去られているという。大正年代は私の幼年期に当たるが、その年齢なりの印象が残っている。その中から記憶を掘り起してみたい。
大正十五年（一九二六）七月二十八日、加茂川で大洪水があった。その日は朝七時過頃から降り始めた。やがて篠つく、又は車軸を流すという

形容詞そっくりの豪雨となった。降り止むどころかむしろ段々強くなる。二時間余り続いたようだった。大水と杞憂していたことが現実になった。外は庭も畑も水浸しで溢れるよう。台所脇の堀川はその水をうけて矢のような流水。漸く止んで来たので表へ出てみた。自宅の下方から湛水が始まり、秋房地区の端まで深い所は床上二メートルもあった。濁水は加茂川から土手を越えてとんだん流れこみ、色々の浮遊物を浮かべて遠慮なく家の中まで浸入してくる。各家は只手を拱くだけ。秋房地区の損害は甚大だった。堤沢の田圃は上より南側の山の傾斜が雨で崩れ埋没した。加茂川辺りに鯉を飼っていた人があったらしいが、いくつもの小養魚池は溢水により全部流されたようだ。対岸の八幡様の方をみると、上流の土堤を越え濁流がうねるように駒岡、天ヶ坂の台地の裾を迂回、八幡様の台地の裾を洗って本流に合している。その地勢を見て台地が砦のように観えた。昔、ここを砦として守り、一戦できたかも知れないと思っ

た。一瞬の夢か。
町の様子を見に表通りに出た。木橋は全部流失、向上条との交通は遮断された。町当局にはショックだった。後日
終戦後、私は荒れ果てた農村経済と人心を立て直すため、農協の役員としてあらゆる知恵を絞る事業を興しました。しかしどうしても考えねばならないのが通信網でありました。中でも多数の組合員が希望しているのが電話でした。その頃七谷では、三八豪雪等の影響で電話を待望する者が多かったのですが、当時電話は国営で、七谷で普通電話への加入可能な「普通加入区域」に指定されているのは黒水のみでした。また普通電話は何分にも高価であり、七谷地区七二二戸の内架設電話数は四九戸に過ぎませんでした。私は当時の古川七谷郵便局長と相談のうえ、「七谷地区加復興に際し通学、交通を確保するため大橋、駒岡屋橋、葵橋の三つがアーチ式の鉄橋となり、流失の心配はなくなりました。西宮橋は県の所管で、町からアーチ式にするよう要請したと聞いていますが出来なかつたらしい。復興で架けられた橋は今、一本も残っていない。
(明治四十四年生)

農村集団自動電話（農集電話）架設の思い出



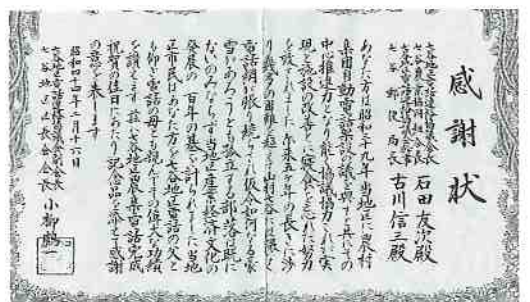
下高柳

石田 友次

入電話促進協議会」を作って七谷全域を普通加入区域に編入するための運動を起し（会員二〇八戸）、三十九年三月一日の電電公社を手始めに議会等への陳情を繰り返しました。ちょうど同年六月二十九日に国会で、一回線を数軒共同で利用する分安価に架設できる農集電話法が通過しました。そこで七月には協議会員全戸が農集電話への加入を希望する意思を確認、その後は目標を普通電話から農集電話の導入へと切り換え十二月には電話自動交換機の設置と地下ケーブル工事が完了、翌年二月七日には無事祝賀開通式を執り行いました。すると翌日からそれまで無関心だった人達



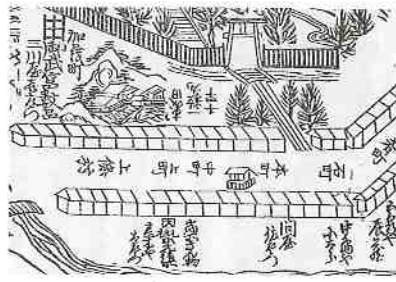
ももちろん苦勞も多かったです。第一次加入者の電話は聞き取りにくく、第二次分が良かったため取り替えて欲しいとか、五、七軒を一回線で賄ったので急いでいるのに通じないといった苦情が寄せられ、大変でした。
その後五十七年に「七谷地域の集団自動電話が一般電話に変わります」という通達がありました。これが現在の電話です。携帯電話の普及著しい昨今、過去私達が苦勞したことが知られているだろうかと思ひ、粗文を記した次第です。
(大正四年生)



▲ 協議会員から石田・古川両氏へ贈られた感謝状（昭和44年2月16日付）

探しています

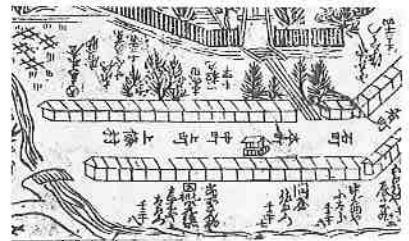
◇ 写真は安政二年(一八五五) 初版刊の「東講商人鑑」に載っている加茂の紹介部分です。どちらも加茂・上条の町場を紹介している部分ですが、発行年により宣伝の掲載商家も異なります。二つをみると、次のような商家が出ています。



山本屋治右衛門(肴町)・五泉屋辰蔵(同)・中島屋小太郎(穀町)・問屋佐右衛門(本町)・森田一粒丸(上町)・三川屋喜左衛門(仲町)・真木屋太右衛門(上条新町)などです。

◇ 森田一粒丸や三川屋さん、真木屋さんについては、小紙六号発行後、市民の方から情報寄せられ、分かっ

の商家について、お分かりになりませんかでしょうか。



◇ 例えば、「山本屋治右衛門」と「中島屋小太郎」です。実はこれら商家について、これまでいろいろ調べているのですが、確たることが分かりません。

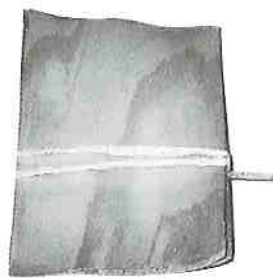
◇ 山本屋治右衛門は幕末加茂の役者岩井かほ世と共に、金沢などで興行の座元を勤めたり、旅籠商売をしてきたことは分かるのですが、それ以上のことは分かりません。ご存知の方は教えてください。

◇ また問屋佐右衛門は幕末に北海道の函館へ渡り、秤座を開いている様子なのですが、詳しいことはわかりません。

◇ 「大福帳」などをお持ちの方、あるいはここに出てこない商人でも宜しいですが、お分かりでしたらお教え下さい。



▲ 終戦時の東芝加茂工場*



▲ つけ木

◇ 戦時中の疎開工場の進出は、戦後加茂が産業の転換を果たすきっかけとなりましたが、それらの工場が疎開した当初の様子や、周辺への影響を見聞きされた方はおられますか。

◇ 下条地区では昭和三十年頃まで「つけ木」と呼ばれる着火材が生産されていたそうです。マッチの普及に伴い姿を消したこの産物の生産に使われた道具や、売上の時の受け取りなどがどこに残っていませんか。

◇ 昭和の初期、上条の山中で弘長三年(一二六三)の年号が刻まれた墓石が出土し、当時の新聞紙上で紹介されました。この遺物の調査をしたいと望んでいるのですが、行方を御存知の方はおられますか。



▲ 古い石造物の例(小貫地区)

「墓が現はれた」

▲ 加茂の向上條山崎で
全くと珍らしい発見

今より六百六十六年前の弘長三年(一二六三)の年号が刻まれた墓石が出土し、当時の新聞紙上で紹介されました。この遺物の調査をしたいと望んでいるのですが、行方を御存知の方はおられますか。

▲ 墓石出土を報ずる記事より
(昭和四年十二月十九日付、中央タイムス) 弘長三年銘が確認されれば、石造物の銘文としては県内最古級となる



▲ 伝統的な郷土食「ツットコ」という容器に入った煮しめ

◇ 近年の生活環境の変化で、食についても多くの習慣が途絶えようとしています。そこで、「かつてはお盆や正月になると決まって食べた」「一年でこの日だけは食べなかった」というような料理や食材について、どなたか話をきかせていただけませんか。

編集後記

今号では、加茂を襲った代表的な災害である水害と雪害の体験者から寄稿をえました。淡々とした叙述の中に、若者世代には想像の及ばないかつての加茂が描かれていて、刺激に富んだ内容です。古墳時代の遺構や、地名から加茂の側面を探る二本の小論ともども、ぜひ御味読ください。

* 東芝電気器具株式会社「わが社廿五年のあゆみ」より